

#### 4. 学生グループ共同研究報告

## 多世代による地域づくりに向けた研究 ～郊外住宅地の男性に着目して～

研究代表者：青木 拓磨

共同研究者：石田 勝士・谷邨 透哉・村田 季美果

- 第1章 研究の背景と目的
- 第2章 研究テーマをめぐる概況
- 第3章 研究対象の特徴
- 第4章 子供を介した多世代交流活動の実態調査
- 第5章 イベント参加者の多世代交流に関する実態調査
- 第6章 結論

### 第1章 研究の背景と目的

現在、日本で今後も増加していくことが予想される高齢化に備え、これからの社会は、様々な世代の住民が自主的に世代間交流（多世代交流）と共生のための地域活動に取り組んでいくことが重要になるとされている。しかし、地域での世代間交流を行うにあたって、男性は若いうちから定年まで働き続けているため、日常的に地域での活動に参加する暇がないために地域でのつながりを構築することが困難であるという問題がある。その結果、近所の人とさえもコミュニケーションを取ることが出来ず、リタイア後に地域での孤立を招いてしまっている。また、とりわけ郊外の計画的に開発された住宅地では都心に通勤するサラリーマンが多く、リタイア後には仕事でのつながりが失われた上に地域でもつながりが構築できていないため、より孤立を招きやすいということが言われている。しかし男性であっても、子供や自分の経験を活かすことによって地域でのつながりを構築できる可能性があると考えられる。

そこで本研究では奈良県の郊外住宅地を対象に世代間交流の実態や地域での取り組みを明らかにするとともに、男性が参加しやすい地域活動や活動を行うための方法は何かを明らかにすることを目指す。その際、「男性は子供を介した活動や自分の経験を活かした活動を行った方が地域活動に関わりやすい」を仮説として検証する。

### 第2章 研究テーマをめぐる概況

#### 2-1 多世代交流と地域、男性

##### (1) 多世代交流の意義

高齢者、子ども、社会人、学生など、様々な世代を超えた交流のことを多世代交流と言う。多世代交流は、それぞれの世代に互恵関係が生まれるだけでなく、文化の継承や地域社会にも影響を与えるなど多くの利点を持っていると考えられる。しかし、かつて地域内で行われていたような多世代交流は、様々な社会環境の変化により失われてきており、親子同

居が一般的であった頃に比べ、核家族化により、家族内の多世代交流は減ってきている。このため、現代においては、意識的に多世代がつながる交流が地域社会に求められている。

## (2) 郊外住宅地の男性について

男性はコミュニケーションが元々苦手であると言われており、さらに仕事で時間がなく、地域での付き合いの程度について女性との差が生じている<sup>1)</sup>。しかし、男性が地域にかかわらない理由は世代ごとに様々であり、男性と地域を取り巻く現状は複雑であるといえる。

例えば、サラリーマンの男性の社会活動への関心や、地域活動・ボランティア活動への参加の有無についてみると、サラリーマンを含む「勤め人」は、他の職業に比べて参加の割合が低いことが「地域活動・ボランティア活動に関する意識調査報告書」(2011. 千葉県教育振興財団)により明らかになっている。このことから、サラリーマンなど勤め人が多い郊外住宅地では、男性の地域活動、多世代交流活動の参加促進の必要性が高まっていると考えられる。

## 2-2 ライフステージから見る地域への関わりの現況

### (1) 子育て男性の地域活動の現状と可能性

しかし、男性は地域活動への参加が困難であると考えられる一方で、近所づきあいに関してみると、同じ男性でも子供がいる世帯は「つきあいはほとんどしていない」と回答した割合が少ないことがわかる。この結果は子供という存在が近所付き合いを促してくれる存在であることが推測される。しかし、『父親同士の交流の現状と可能性に関する調査』(2014. 第一生命)によると子どもを持つ男性は「何かしらのテーマやイベントがないと同じ父親同士ですら交流するきっかけというものがつかめない」と回答した割合が66%と高く、何らかのきっかけが必要となっている。そのきっかけの一つとして挙げられるものが子供のスポーツチームへの参加であると言われている<sup>2)</sup>。小学生以下のスポーツチームの場合、練習や試合などの機会に親がチームに関与することが多く、必然的に親同士の交流も発生しやすいことから、スポーツチームのようなイベントやテーマは父親同士の交流に有効に作用するものであることが予測される。

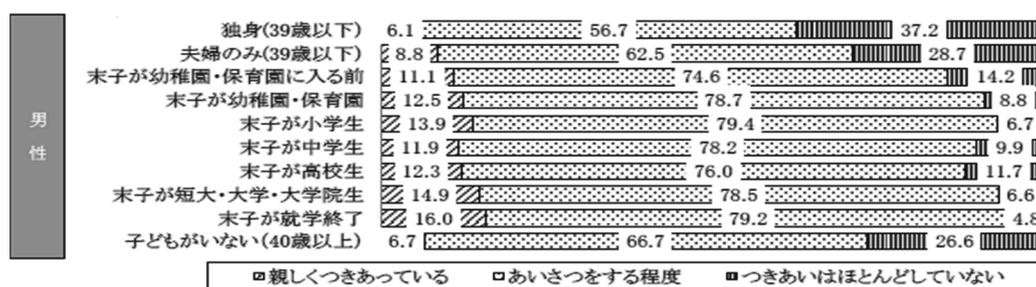


図2-1 近所づきあいの現状(『近所づきあいの状況』(2015. 第一生命))

### (2) リタイア後の男性の地域参加

高齢者もまた、孤立や閉じこもりを防ぐために地域でのつながりや生きがいを形成することが求められるが、一般的に職業からのリタイア後には対人接触頻度が減少する傾向がみられる。そこで仕事からのリタイア後の社会的活動をどのように援助、確保していくか

が問われている。

リタイア後、地域に出られずひきこもりになってしまう人もいるため、地域での孤立を防ぐために社会的準備行動というものがある。社会的準備行動をリタイア後1年以内に行った男性の地域活動の参加傾向は、行っていない者に比べてクラブ・サークルの参加団体数や地域活動・ボランティア活動への参加率が多いという結果がでている<sup>3)</sup>。このようにリタイア後の男性の地域活動を促すためにはリタイア前の行動が大事であると考えられる。

### 第3章 研究対象の特徴

#### (1) 鳥見小学校区の動態

鳥見小学校区(以下鳥見地区)は奈良市西部に位置している。約50年前に計画的に開発された郊外住宅地であり、現在はほとんどが住宅地である。

鳥見地区は、平成22年度と平成27年度の国勢調査の比較によると5年間で世帯数は324世帯、人口は760人減少し、高齢化率は7%上昇している。(表3-1は鳥見町1～4丁目と三松ヶ丘を合計した値であり、三碓、富雄川を除く)

表3-1 鳥見地区基礎統計データ比較(平成22、27年度国勢調査より作成)

	平成22年	平成27年	変化率
世帯数	2695	2371	▲324
人口	5849	5089	▲760
人口/世帯	2.17	2.15	▲0.02
高齢化率	31%	38%	7%

#### (2) 鳥見地区で活動する活動団体・組織について

鳥見地区で活動する組織・団体は様々であり、例として以下の団体が挙げられる。

##### ① 鳥見地区自治連合会

鳥見地区自治連合会は奈良市自治連合会の下で構成されている自治会の1つである。鳥見地区自治連合会も鳥見町一丁目～三丁目、富雄団地自治会、三松ヶ丘自治会、マンションなどの自治会から構成されている。

##### ② 鳥見地区スポーツ・文化協会

グラウンド等のスケジュール管理、地域住民の世代間の親睦を目的に、地域の運動会「とりみんピック」と「鳥見文化祭」の年に2回のイベントを主催している。鳥見ファルコンズや鳥見ゼブラーズなど地域のスポーツ少年団や音楽などの文化系団体が所属している。

##### ③ 鳥見地区社会福祉協議会

奈良市社会福祉協議会の鳥見デイサービスセンター「ふらっと」内に本部をおく。多くの地区住民の参加と協力によって、『住み慣れた地域で安心して暮らしたい』とする住民共通の願いを実現する福祉のまちづくりを目的とし活動している。役員のほかに、ボランティアや教育関係者も活動に携わる。なお、「ふらっと」内にある旧幼稚園を改装した「まんま」では、奈良市社会福祉協議会や地域との協働による多世代交流を目的としたコミュニケーション麻雀や認知症カフェ、鳥見ン家カレーのふるまいなどの活動が行われ、コミュニティの交流拠点となっている。

## 第4章 子供を介した多世代交流活動の実態調査

本章では、男性は子供を介した活動や自分の経験を活かした活動を行った方が地域活動に関わりやすいという仮説を明らかにするために子供を介した多世代交流活動の取り組みの内容や実態を明らかにし、その考察を行う。

実態調査として、小学校の保護者による地縁型の団体であるPTAや、地域の子どもたちを対象としたスポーツ・文化活動などのテーマ型活動の中で代表的なスポーツ少年団A、Bを対象とした団体代表者へのヒアリング調査や、スポーツ少年団を対象にしたアンケート調査を実施した(調査実施は2017年10月から12月)。本章はその結果をまとめる。

### (1) 団体代表に対するヒアリング調査結果

各団体の特徴や活動内容、男性の参加などについてヒアリングの調査した結果は、表4-1の通りである。

表4-1 鳥見地区における子供を介した多世代交流活動のヒアリング調査結果

	PTA	スポーツ少年団A	スポーツ少年団B
団体の加入・参加者の特徴	○小学校の全保護者(家庭数305世帯)	○男子28人女子1人 ○保護者 ○コーチ(大学生)	○部員は20人程 ○保護者 ○OBコーチ
団体の活動内容	○地域の教育活動を盛んにし、環境づくりをすること ○地域行事の手伝い	○活動日時は毎週火木金、17:00~20:00 ○保護者は全員が何らかの部に所属し活動をサポート	○活動は土日祝日、日曜日は試合が多い ○保護者の係、父親コーチ
活動の成果・評価	○PTA活動の存続を望む声	○頑張る子供たちの姿を見て地域の人に活気が出る	○チームとしてのみんなが集まれるこの場を維持していくことが一番大事
地域との関係や影響	○同世代交流の実現 ○地域に対する意識の変化	○皆の子供をみんなで育てる ○地域と関わりを持つように ○PTAの本部役員率が高い	○関係者の交流の持続性がある
男性の地域参加について	○夏祭りも夜の警備などは父親が担当	○パパ会がある ○子供たちの将来への影響	○多くの父親がコーチとしての参加している ○個人的な父親の交流はある
卒業後の活動意向	○PTAとしての活動は子供が在学中のみ ○地域コーディネーターなど別の地域活動へ移行	○活動の継続性がある	○活動の継続性がある

### (2) スポーツ少年団に対するアンケート調査について

回答したスポーツ少年団に所属する子供の保護者についてみると以下のようなになった。

表4-2 テーマ型組織アンケート回答者の特徴

	男性	女性	団体別の合計
スポーツ少年団A	3人	19人	22人
スポーツ少年団B	7人	1人	8人
性別ごとの合計	10人	20人	30人

### (3) 子供を介した世代交流活動について

以上の調査結果をもとに考察を行う。

#### ①多世代交流の実態

まず子供との関わり方をみると、PTAによる活動は子供の安全見守りや、環境づくりというように間接的な子供との関わりがあるといえる。一方、スポーツ少年団では、活動の運営のサポートを通じた間接的な関わりに加え、子供たちへの指導やチームの応援などの直接的な子供との関わりがあるといえる。またアンケート結果からも、団体の活動以外にも保護者や子供との交流があることがわかった(図4-1)。以上のことからいずれの団体も子供との交流の場やきっかけとしての機能があることがいえる。さらに団体の活動を通して地域活動への意識が強まることで、地域コーディネーターやPTA本部役員といった別の地域活動へと移行する人がいることも明らかになった。

#### ②男性の地域参加について

つぎに地域活動への男性の関わり方をみると、PTAでは活動自体に男性の関わりはあまりみられなかったが、夏祭りの夜の警備の担当は男性であるなど、全く地域活動に関わっていないということではない。一方、スポーツ少年団では、団体の活動日によって男性の関わり方が異なり、平日に練習をするスポーツ少年団Aよりも、休日に練習をするスポーツ少年団Bの方が男性の関わりが多くみられた。しかし、スポーツ少年団Aでは、男性のみの集まりであるパパ会を作るなど、男性が地域と関われる場が意図的に作られている。スポーツ少年団Bではパパ会はないものの、父親同士の個人的なつながりがあり、コーチとしての役割がある。またどちらのテーマ型組織もOBが練習に参加し、卒業後も活動の継続性があり、リタイア後の社会的準備行動へと通じる可能性もある。

続いてアンケート調査結果より、男性の地域に対する意識の変化がより強くみられた(図4-2)。理由としては「子供が色々な人にお世話になっていたことがわかり、協力しようという気持ちになった」「自分の子供だけでなく地域の子どもたちの大切さをより感じた」「みんな野球が好きで想いが同じになる」などがあげられ、いずれも「子供との関わり」、スポーツを通じたチームへの「愛着」が関係していると考えられる。しかし、テーマ型の組織ではテーマが絞られていることで、チーム内でのつながりが強くなる一方、外とのつながりが弱くなるように感じられた。

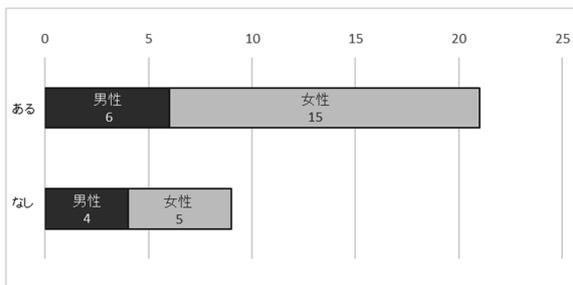


図4-1 他の保護者や子供との交流

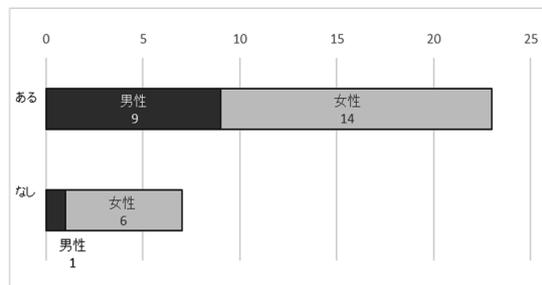


図4-2 地域活動に対する意識の変化

(いずれも、スポーツ少年団A、Bの合計)

以上のことから、男性の関わる地域活動は主体が男性もしくは主体的に男性が関われる活動であることがいえる。また団体において明確な役割があることや団体への仲間意識が芽生え、親しくなることが求められるといえる。

## 第5章 イベント参加者の多世代交流に関する実態調査

この章では、奈良県立大学佐藤ゼミの学生が8月から12月の間に企画したイベントや、7月に行われた鳥見地区夏祭りでのアンケートの結果を通して、参加者の特徴とその影響について考察していく。

### (1) イベントおよびアンケートの概要

以下が、学生が企画したイベントおよび行ったアンケートの概要である。

#### ① イベント一覧

ジャンボすごろく	8月11日(金・祝)	巨大秘密基地を作ろう!	11月11日(土)
虎カフェ	8月19日(土)	わくわくボードゲーム祭り	12月9日(土)
鳥見ウォークラリー	10月14日(土)	(参考)鳥見ふるさと夏祭り	7月22日(土)

#### ② アンケートの概要

このアンケートは、参加者のイベントに対する満足度や、住民の地域活動に対する意識、行動などから、どのような活動が多世代交流を促進するか調査することを目的としている。

- ・調査対象：学生企画のイベントに来場した38名(男性17名・女性19名(性別未記入2名))と鳥見ふるさと夏祭りに来場した男性34名 合計72名(男性51名・女性19名)
- ・調査項目 属性(年齢、性別、居住地)、イベントの参加のきっかけ、満足度、これまでの地域活動への参加の有無、参加意思のある活動など

### (2) アンケート調査の結果

学生企画のイベントの来場者については、鳥見ウォークラリーや「秘密基地を作ろう!」、ジャンボすごろくなど自分でアイデアを出して楽しむものや、屋外での活動については多くの来場者が見られた。特にジャンボすごろくと「秘密基地」では、ほかのイベントに比べ男性の比率が高かった。一方で、虎カフェやボードゲーム祭りなどの室内で行うイベントについては来場者が少なかった。また、イベントの満足度については、すべてのイベントが参加者から高い評価を得ることができ、イベントはおおむね成功したといえる。

調査対象者72名の地域活動の経歴を性別にみると、女性は大半が何らかの地域活動に参加したことがある一方、男性は全体の半数近くが「なし」と答えている。また、地域活動に参加したことがあると答えた人についても、趣味や交流といったものに比べ、自治会などの「地域貢献を目的とした活動」やPTAなどの「子供の学校関係等の活動」など、組織化・公式化された地縁型の活動に参加してきたことがわかる(図5-1)。

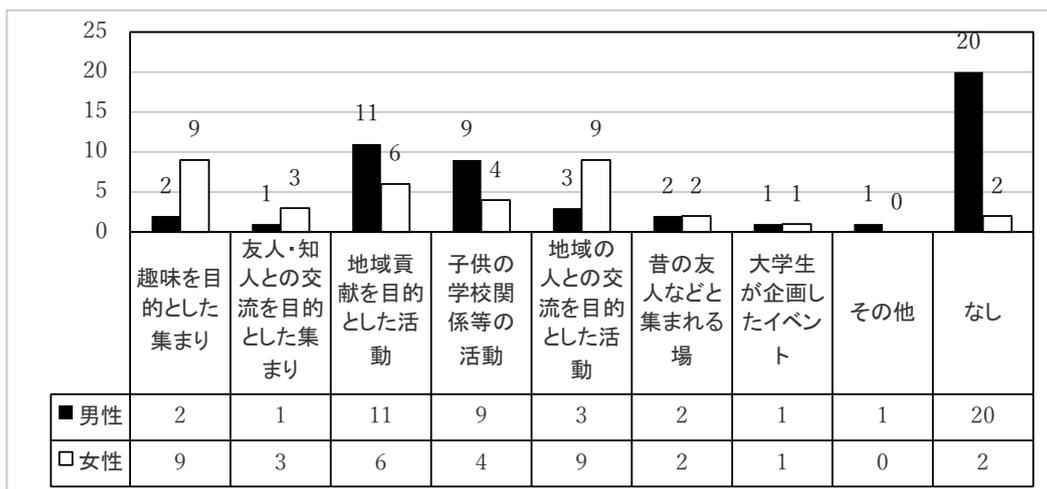


図5-1 性別地域活動の経歴(複数回答)

次に、参加意思のある地域活動を性別にみると、「なし」と答えた人が男性は8人と、図5-1で「なし」と答えた人(20人)に比べ少ないことから、活動歴はなくても、地域活動に参加したいと考えている男性が多いことがわかる(図5-2)。特に、「趣味を目的とした集まり」の活動歴をもつ人は2人と少ないにも関わらず、「自分の趣味や得意分野を生かせる、楽しめる場」に参加したいと答えた人は11人と多くなっている。

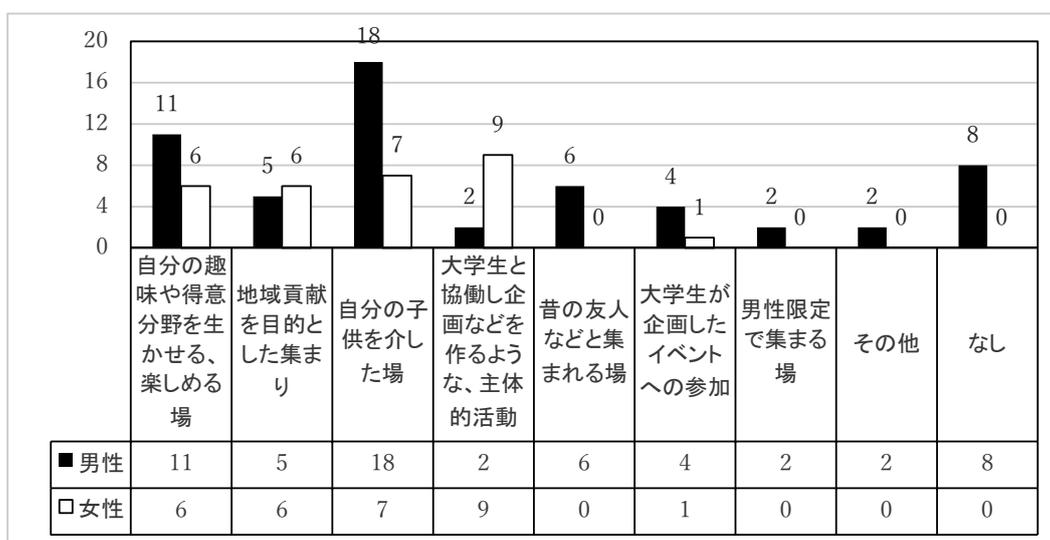


図5-2 性別参加意思のある地域活動(複数回答)

### (3)まとめ

アンケートの結果から、女性と比べて男性の地域参加は進んでいないものの、地域と関わりを持ちたい男性は数多くいることがわかり、何らかの理由によって地域参加が阻まれていることがわかる。このため、男性が地域と関わりを持つために、趣味や得意分野を中心とした活動をより充実させることや、男性が地域に出やすい環境づくりをしていくことが重要であると思われる。

## 第6章 結論

本研究では「男性は子供を介した活動や自分の経験を活かした活動を行った方が地域活動に関わりやすい」という仮説を立て研究を進めてきた。

子供を介した活動として、今回の実態調査では鳥見地区を対象にし、3団体にヒアリング調査、アンケート調査などを行った。いずれの活動も多世代交流の場として機能しており、参加によって地域に対する意識の変化が起こるなど多世代による地域づくりに有効な取り組みであることが考えられる。子供を介した活動に参加することにより、地域に対する意識が変わり、地域のリーダーが生まれるなど地域にとって良い傾向が見られた。また男性に注目すると、特にスポーツ少年団の活動では男性の保護者もかかわり、パパ会やコーチとしての参加などにより地域とのかかわりを作っていることが分かった。またスポーツの指導、試合の送り迎えなどの役割を持つことができ、男性が主体的に活動に参加できていることで、男性が参加しやすい、入りやすい活動として有効であるものと思われる。PTAの活動ではイベント時に男性が活躍するなどの役割はあるものの、いまだに女性が中心になって活動し、男性は参加しづらい体制であると思われる。さらに日常的に男性の役割が発揮されるような体制づくりが今後の課題であると考えられる。

また、学生企画のイベントとして今回の実態調査では多世代交流や、自分の経験を活かせるような活動として男性の参加を目的に5つのイベントを企画し開催した。ハロウィンのウォークラリーや秘密基地づくりなど野外で行う、普段経験することのできないイベントには男性が多く参加することなどは分かったが、あくまでも参加にとどまり、地域活動に入り込む、主体的に参加してもらうまでのステップには届かなかった。趣味など自分の経験を活かした活動は1日のみのイベントで集客することが難しく、課題が残る形となった。

今回の研究を通して、子育て世代の男性にとって自分の子供を介した活動が有効であることが確認でき、その中でもスポーツ少年団のようなテーマ型組織の活動では男性が役割を担うことができる環境があるため、多世代による地域づくりに向けた活動として有効であると思われる。また、スポーツ少年団では活動が継続していることでOBの参加が可能になり、リタイア後の地域での孤立を防ぐ社会的準備行動にもなりうるのではないだろうか。そのためには活動を継続していくことが必要であり、部員の確保は今後も課題であるといえる。また、テーマ型の組織では、テーマが絞られていることで、チーム内でのつながりが強くなり、外とのつながりが弱くなる傾向があるように思われる。そこで今後地域の立場から見て望まれる活動としては、各スポーツ少年団内での活動に留まることのないように、鳥見スポーツ文化協会など各団体を束ねる組織単位での地域活動が必要ではないだろうか。現にとりみンピックや鳥見文化祭なども行われているが、さらに鳥見地区全体に目を向けた、開かれた活動を行っていくことで新たな地域としてのつながり、可能性が生まれてくると感じた。

一方でほかの世代の男性に対しては、参加だけでなくいかに主体的に地域活動にかかわってもらうかという点が問題であり、継続的なテーマ型のイベントや組織が求められるが、様々な男性がいる中でそのテーマや対象をどのように設定していくかが今後の課題といえるのではないだろうか。

## 参考文献

- 1) 宮木由貴子、(2014)、『父親同士の交流の現状と可能性 —子供をきっかけとした父親同士の関係性がもたらす効果—』ライフデザイン研究所 <https://goo.gl/hS2xel>
- 2) 第一生命、(2014)、『父親同士の交流に関する調査 —「パパ友」で今どきの父親の何が変わるのか—』 <https://goo.gl/r3kCwz>
- 3) 鈴木征男、(2007)、『サラリーマンの退職後の社会的活動 —リタイア直後の社会的準備行動の有効性—』ライフデザイン研究所 <https://goo.gl/ygoghg>